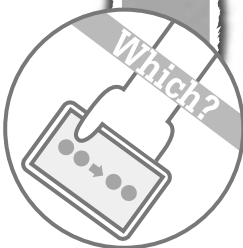


“傍観者”にならないために



私たちはよいことをするし、すがすがしい気分になります。しかし、よいと分かっていることでも、なかなか実行できないのもまた人間です。例えば、バスや電車の中で立っているお年寄りを見かけても、「誰かが席を譲るだろう」と思ったり、周囲の視線が気になったりして、声をかけることができなかったという経験はありませんか。今回は、よいと思っただけを進んで行動に移すための心がけについて考えます。

## 拾う？ 拾わない？



ある土曜日の昼下がり、松井洋平さん

(28歳)は同僚の武田智和さん(28歳)と一緒に、街の映画館に出かけました。館内は、今年いちばんの話題作を観に来た家族連れや若者たちで満員です。映画は大団円で終わり、会場内が明るくなる

松井さんと武田さん  
もそれに従って

と、観客は列をなして出口へと流れてきました。

出口へと進みながら、映画の感想を話し合っていた、そのときです。少し先を歩いてきた同年代の女性の鞆から、ふとした拍子に何かがこぼれ落ちました。その女性は友人との会話に夢中で、気づいていないようです。

周りの人たちは落とし物が目に入っていないのか、そのまま通り過ぎていきま  
す。松井さんも気にはなったものの、人  
波をかき分けてまで女性に声をかけるの  
は、なんとなく気が引けました。



「まあ、誰か近くの人が知らせてあげる  
だろうし……」

松井さんが考えあぐねているうちに、  
女性は今にも人ごみに紛れてしまいそう  
です。そのとき、隣にいた武田さんが  
さっと落とし物を拾い上げ、女性に駆け  
寄って声をかけました。

「すみません。これ、落とし物でしたよ」  
声をかけられた女性は、落とし物を手  
渡されると笑みを浮かべました。それは  
定期入れだったようです。

「ありがとうございます。助かりました」  
そう言うと、その女性は何度も頭を下  
げながら去っていきました。松井さんは  
その光景を間近に見て、「おれは拾えな  
かったのに、武田はすごいなあ」と感心  
しました。

# 傍観者効果の実験

私たちの日々の暮らしの中には、よいと分かっていることでも、行動に移すのをためらってしまうという場面が往々にしてあります。松井さんも落とし物を目にした瞬間、拾って声をかけなければ、

という思いも胸をよぎったでしょうが、実際には行動に移すことができませんでした。そこには、心の「バリア(障壁)」が見え隠れしています。

心理学では、そのバリアについて「傍観者効果」という言葉で説明しています。傍観者効果とは、約四十年前にアメリカの社会心理学者、ラタネとダーリーの実

験によって明らかにされた集団心理の一つです。その実験とは、次のようなものでした。

アンケート調査と称して、調査員に扮した女性が、被験者の大学生を部屋へ案内します。そこで女性は学生に質問用紙を手渡し、席に着いてアンケートに答えるように指示した後、隣の部屋へと移動します。そして、学生が質問用紙に記入していると、突然、隣の部屋からイスが倒れる音と女性の悲鳴が聞こえてきます。そのとき、学生がどのような行動を取るのかを観察する実験です。



学生が部屋に一人きりの状態じようたいでこの実験を行うと、その約七割が女性を助けようと行動を起こします。ところが、部屋に二人でいた場合には、女性を助けようと行動した学生は四割に減りました。さらに研究を重ねたところ、その場に居合いあ



わせる人数が多くなればなるほど、救助行動を取る学生の割合わらひが減っていったというのです。

この研究から、一人きりならためらわずにできる人助けでも、周囲に人がいると、「傍観者」になってしまう可能性かのうせいが誰



にでもあるということが明らかにになりました（ラタネ、ダリー共著／竹村研一、杉崎和子訳『新装版 冷淡な傍観者』ブレーン出版参照）。

このような心の働きは、生活のさまざまなかたつて、私たちの行動に影響を及ぼしています。例えば、職場の共有スペースが散らかっているのを見たとき、誰かが片付けるだろう、という思いからそのまま放置してしまうことや、座席の埋まったバスや電車で妊婦さんやお年寄りが乗ってきたとき、ほかの誰かが席を譲るだろう、と考えて席を立たないことなどです。先に紹介した松井さんの例も、傍観者効果によってバリアが高まった結果と言えるでしょう。

# 経験がバリアを下げる

武田さんが戻ってくると、松井さんは素直な気持ちで言いました。

「あんなときにさつと体が動かなくなって、ちよつと感心したよ」

「いやいや。おれも前に本屋で定期券を落としたことがあってね。そのとき親切な人に拾ってもらって、助かったんだ。それで自分も気をつけるようにしているんだけど、実際にやってみると、大したことじゃないよ」

武田さんは、松井さんの言葉に少し照れたように、そう答えました。

落とし物をした人に声をかけることをためらった松井さんとは対照的に、「傍観

者」から抜け出して行動を起こした武田

さん。自分にも同じような経験があったので、相手の状況を察して一步を踏み出せるようになった様子です。

そして、注目すべきは「実際にやってみると、大したことではない」という言葉です。武田さんも、以前は松井さんのように、声をかけるのをためらったことがあるかもしれません。それでも一度実行してみれば、心の「バリア」は低くなるようです。

先ほどの傍観者効果の実験を映像化したものを見て援助行動のステップを学ん





だ人は、実際に手を差し伸べるべき相手に出会った場合に人助けを実行する率が、事前に学んでいなかった人の二倍にまで高まったという報告もあります（ローレン・スレイター著／岩坂彰訳『心は実験できる

か』紀伊國屋書店）。心の「バリア」を低くする「一度でも実行したという経験」は、「疑似体験」でも効果があるようです。

飛行機の客室乗務員など、特殊な職業につく人が非常時を想定して行う訓練も、そうした「疑似体験」の類でしょう。客室乗務員に内定した新人は、乗務前の一か月半から三か月間の訓練期間中、七割ほどを保安要員としての訓練に充てると言います。乗客の急病や事故などがあつたとき、乗務員はひるむことなく迅速に行動し、乗客の安全のために最善を尽くさなければなりません。そのために訓練期間の大半を使って、応急処置や緊急時の脱出などの訓練、つまり緊急時の疑似体験を繰り返すことで、いざというときに躊躇せず行動できるようにするのです。



# 人を救った 警察官の勇氣

次に紹介するのは、緊迫した状況下で目の前の人を救うために驚くべき行動を起こした警察官の話です。

平成十九年二月六日、東京都板橋区にある東武東上線ときわ台駅で事故が起りました。線路に飛び出した女性を救助しようとした警察官が、ときわ台駅を通り過ぎる急行電車が迫るなか、レールとプラットホームの間のわずか三十センチほどのすき間に女性を押し込めて、自身の体を盾にしたのです。

現場に駆けつけた同僚から救出

され、意識不明の重体で病院に搬送された警察官は、宮本邦彦警

部（当時・巡查部長）でした。宮本さ

んは、その日のうちに緊急手術を

施され、集中治療室に移って懸命

な看護を受けることとなります。

この事故は発生直後から連日のように新聞やテレビで大きく取り上げられ、「勇氣ある行動」として感動を呼びました。

宮本さんのもとにはお見舞いの手紙や花束が届き、日本中の人々が快復を祈りましたが、六日後の二月十二日午後二時二十五分、家族に看取られながら、宮本さんは静かに息を引き取ります。訃報は日本全国を駆け巡り、多くの人々がその死を悼みました。

# 日ごろの 献身的な姿

電車が近づいてきたとき、宮本さんには自分の命を守るために一人で避難することもできたはずですが。しかし、そんな迷いや電車が迫ってくる恐怖を打ち払い、女性の救助のために尽くし抜きました。

子供や大人に向けて偉人伝を語り聞かせる活動を各地で展開する株式会社寺子屋モデル代表の山口秀範さんは、現代の偉人伝として宮本さんの絵本を執筆するため、遺族をはじめ多くの人々から話を聞き、その生涯を丹念に取材しました。

そこから浮かび上がってきたのは、街行く人へ笑顔で挨拶をし、高齢者の手を引いて踏み切りを渡り、時には若者の人生相談にまで応じる宮本さんの献身的な姿でした。山口さんは、その著書『殉

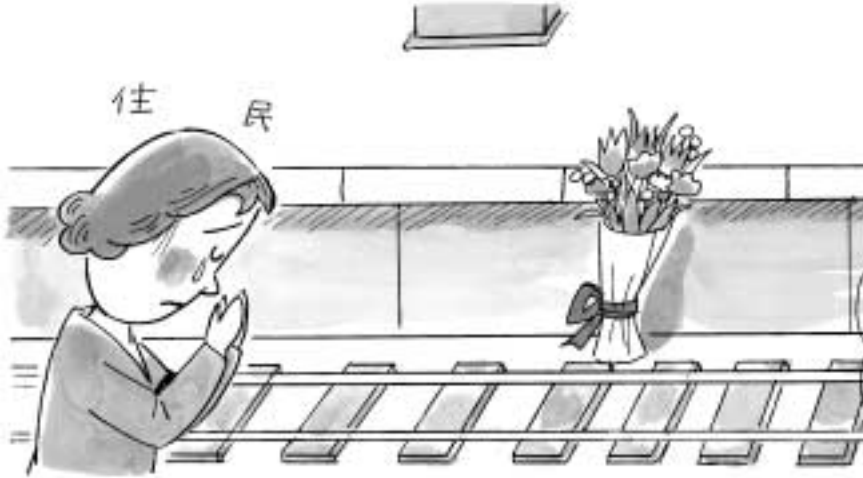
職・宮本警部が伝えたかったこと』で、次のように述べています。

——私たちは宮本さんの勇氣ある死を立派な最期と感じるが、本当に驚き敬うべ



きは、その死の瞬間だけではなく、むしろその「生」なのではないか。住民や子供たちに来る日も来る日も誠実に手を差しのべ続けた地道な「生」の中に、彼が最後に示した勇気がすでに用意されていたのではなかったか――

日ごろから地域住民と身近に接し、警察官としての職務を超えた人助けを行ってきた宮本さん。その宮本さんが非常時に発揮した勇気は、驚嘆に値します。多くのの人にとって、これほどの場面に遭遇することはないでしょうし、また、究極とも言える献身的な行動はなかなかできることではないでしょう。しかし、日ごろの小さな実践の積み重ねのうえに、このような強い勇気が発揮される場合もあるのです。



# なせばなる

「勇なるかな勇なるかな、  
勇にあらずして何をもって行なわんや」



上の言葉は、江戸時代の  
儒学者・細井平洲が、財政破  
綻寸前の米沢藩の藩主に就任  
する直前の弟子・上杉鷹山へ  
贈ったものです。

師の教えを胸に秘めた鷹山は、藩の財  
政改革に果敢に取り組みました。江戸で  
の生活費を千五百両から二百両まで減額  
するなどの節約を行いつつ、城内につくつ  
た畑をみずから耕し、農業を奨励するなど  
して民政事業を精力的に行いました。

途中、古参の家老たちと対立すること  
もありましたが、鷹山は立ち止まること

なく、改革を推し進めます。その結果、一代で財政再建の基礎を築くに至り、鷹山は江戸時代屈指の名君として、後世にその名を残しました。

その鷹山が次代藩主・上杉治広に家督を譲り渡す際、教訓として詠み与えたといわれる有名な一節があります。

「なせばなる、  
なさねばならぬ何事も、  
ならぬは人のなさぬなりけり」

何事もその気になってやり通せば、必ず成就するものであると説いています。私たちが「なせばなる」の心意気で小さな道徳を実行し、「傍観者」の心理を打ち払う勇気を培いたいものです。



# 心は使えば使うほど 豊かになる

小さな道徳実行の機会、私たちの周りにはたくさんあります。例えば、バスや電車内でお年寄りに積極的に席を譲る、駅前や道路のゴミを拾う。また、自宅に

帰ったときに自分の靴をそろえるついでに家族の分もそろえる等々です。

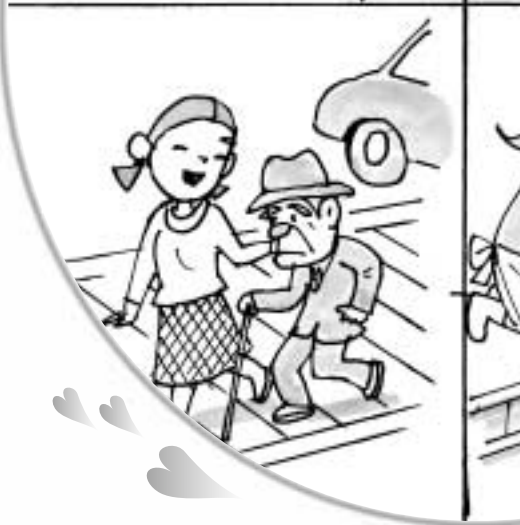
普段やっていなかっただことは、初めは意識的に行わないと難しいようです。し





かし、今より少しだけ勇気を出して実行へと移し、それを何度も続けていけば、抵抗感も少なくなってくるでしょう。

心は使えば使うほど豊かになり、勇気も奮い起こせば奮い起こすほど強く大きくなっていきます。「傍観者」に陥ることなく、一人ひとりが道徳実行の勇気を



はぐくんでいきましょう。一人ひとりの小さな勇気が、社会をよりよい方向に動かしていくのです。

このたびの未曾有の災害に際しても、一人ひとりが一步を踏み出し、日本全体で支え合いつつ、復興までの長い道のりを勇気をもって歩んでまいりましょう。